孟軍議

正札
四一十
へ 5
1437

俳諧

へ5
利
1437
巻

東京都立中央図書館

俳諧叢議

發句之事

發句之一氣發動の不ラザリシテ自然ナリシテ
其国の風あり其不の風あり時代人の氣風
あり一ツ子を云ふ意意よりいさぎよく
之道とさいなん其法と定ること句を事物
の姿と先ずして自己の情と後ずして式意是と
そのひらく俳諧とうらの拾ひ子ると初の新仰
のいとの發句を言葉の句と習ひて他と求を
うれと苦し或人の句と

よ洗湯の湯くふんりおもの
さいてうよ春の夕と添さ面ひく
よ洗湯よ仲秋青〻面のど
春白を何れも面のさとよといてゆ面くゆ
さ〻と情ゆ〻て一句の姿ゆ〻ゆ仲秋ゆ
さよ姿ゆて言ゆの余情ゆ面く余さの気
色もさんてゆり
愛議云言ゆの余情ゆて意中景と者ゆ
ゆ〻と各人ゆの業ゆいてゆ〻ゆ
此性ありて進ゆけんやゆ〻ん遠用の

非諧叢談

作諧叢談

あゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ姿情の
前後と議ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻
れゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻
ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻
物の姿ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻
ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻
物ゆ新〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻
ゆ〻ゆ

此句と言葉とを聚つて義の曰俗語を人和
の通あり天下の一助をなんとするに対
してそこふくかつら出家とそうあれた
らんと言語同断のそうそう
草花のひとあけきらぬのど
うそうそ鶯のうつるよ初のうつ
花と燈ともしてうつるも物の姿と
いつまでもそれと姿情と雲泥のきうれあるそ
さん物の姿とそうそうそれ仏ふそはしいさと
とおりつまへとそうあの句よあるよと御

ちうよ
まちしやいと糸をそうふの月そあ
みそ義はおそりん　は　拉
日高はしいもとさんの屋そうそうそ
お章のまそ色とそ風雅の一体みて次の所そ次の
おりよ例ようそ除の法ふそうそうそうそうは
みてやそうそうそうそうの義句の信よおのそうそ愛
御と思そうそ　整古とそ物の姿と先みそ
そうなそのけの移れちうそと初のそうそ花の中
よおりそうそのの句とそ不道化とそうり室蔵と

ゐるとおもふ

公冬の句も不し出おもふ故

約り冬を酒吞童子に附情

されいなるべて時も酒吞童子し同一おなじ

趣向ふうゝおの部ゝて彼公冬い出ふる分

れんと程ゝの句ありもして一向発情の句伝

おより後の段情を酒吞童子よ麻姿のば

ゆくとゝくふうゝ約り冬のわ文うのそれしふよ

ふれの思邪と詠よふ所ゝ句ゝそゝて彼公

の家冬ふゝゝを俗俗のおゝゝゝゝゝ

作ゝを賀の金塚よ半四郎秋の房ゝて意門

廿二の通心ゝを

服ゝ事

服の句を発句とゝけて芸場ゝを事弟よゝゝよ

服を発句のかけゝを補ゝいてりをのかけら

冬をゝゝゝの中ゝゝ冬ゝを冬ゝ冬ゝ冬ゝ冬ゝ冬ゝ

とて冬ゝとて芸妓と直よゝ宣れ例よ程優の大

根新ゝと服を発句の姿を業よりて冬ゝ

山路よう芸術の詩和ゝゝを意う新ゝゝ芸

場と宣ゝゝゝ服ゝて四ッよ所ゝを発句の

是うたてそれ。なれうたてそ。ゆるうたはんてかなと
趣向と句作のうけはてあり

秋はなほ島作りうり秋の雲　素蕉翁

秋うけり　青の色つま　素堂

此解は高雅のことふ祝言あり。と作者の新しきて
は句書きを居りん可とは限らも出除へきを居りる
るよう。なもの。軸分景濃の春秋記あり又越の言回
ある醫師作集の作とて

素柳はいはれのどとるよ　秋　義

春の雲とあけかりる　月　踏雪

言ふ趣向と句作りといふて秋はなほ島の作りて物の
作りおは秋の夕雲ちるちるとて但如の言ふとて句作
先遠望を趣向と言ふるより秋うけりし青と句作り
ふて春句の夕雲と例ふ作りの春句を寒言春の
詞ひきうと其春の氣色とうてあて猿蓑の月の
趣向ふて秋の雲とあけかりうと句作りて
異議に云趣向と句作りとは此法あるうをよ
ひうふ可ひうとうしう変万態の春句を向ひて
趣向ちうとつてうちう句詩趣向の善悪と
秋を下の隅ようりうと云物拾遺よ

紙ゝよあるじ竹のやどの声

紙よかりる家の下　仙

春雨を沸ゝとくちぬ言を紙ゝよあるじ

やまいやうとて歯くの猫ゝとて姿ゝとゝん

ちゝとゝん古今とおうゝとおうゝく猫

箭の音も野ゝくさのなをし恵方

秋ふゝとゝ秋とゝて越向とちゝとゝん孤子

ゝかゝゝ下仰ゝを句仏ゝかゝゝ越向を一字

ゝゝ二ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

皆ゝく句仏ゝゝて恋句の用をゝくゝゝゝれゝ

なれとはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]ていと大きなる風　其角

裁断の麻の如くしらうらにて　芭蕉

如是我句といひ服といひ其間其場の拙優劣と裁物の可情と趣向とを兼ねる事服の句をあり

あり中之と所句のうらにいつて変らず蕉句の中然る指合去嫌とて合せ趣向とはいひて後句へおのおのあるべし所不ら物に

て点と趣向とはいひて者にもしも場

所なりうりて中之の趣向と一物にて言ひうらく

四句間をかくるふれく趣向と深く言てさる

うらに初句にはいひて七五の事一句もしハ雅の

所名と都て趣向のうり廻しといふ句

愛議云中之ふいりて物をうらにて

物をあり少く物をあり三ツ物のうき

をを一巻の力をはくむれいはんに中之の物

化あり一巻ををひる物をる

正安のうはやをかく次言の句詞

名月の月の冨の照りうす　伯機

称と姥と情ら　猶　之坊

はりうと西行の史と掃いて　秋之坊

[illegible]句脇を紀おうして例の二句合弁
ありと掃除の世界の一物なり又
桜よの連ふとうしてゆと蒙うふ
[illegible]ふう神の[illegible]
洗足ふ安んん孫の月うして
洗足の死[illegible]ふ孫の月うして
[illegible]の二句合弁ふと世界の洗足ふ趣
向とはうしむる[illegible]ふ脇の[illegible]と神[illegible]やけと
[illegible]句[illegible]人の我家よりゆうふ趣向
ふ脇と中[illegible]ふ[illegible]ふ後[illegible]

人の我家ふ[illegible]ふ趣向ふ二句の間[illegible]
ふ[illegible]後句へおうねをちちうりあり
はれのふうり[illegible]ふ趣向ふ
[illegible]句作[illegible]
趣向ふ[illegible]一句とうふひおうと[illegible]後
句へおよはを趣向の用ふり初七名八弁を初子
[illegible]の製作おはゆく中ふ東西[illegible]の八弁と儀を
ふ二[illegible]ふ意門の紀能ふ[illegible]道ふ[illegible]
階[illegible]ふり

八弁

ふるてほたるの入相をうち

其人　ひくくと木枯の角よりしをれて

其情　湯あうりの簾より出るのもを

天相　あるるの数しかとそうきちきれ

時節　門をぬけるよりうをうれて

時宜　ひるれの京恋くも強をして

面影　常ゝあるよりうを作て

作者曰ク俳諧ハ軍中の併あり多ハ時分の句ハ歌あるをおのよりあり時分の句ハあり

くを初いて物もおてひ次

時分　ゝるをうをまりあよ夕飯後

かく一句よハ那の所合ありて何をの句ハ向れて

も所合あるをいつるゝ誠よ何をの

句をいつるをうりくの京葉うしてを人

あるをいるくあるくを人あるの時を其場あ

て天相時節時宜面影其句よ随れてをる

ゝゝゝをを一頃ハ一度よハ那を議をるの中よ

一ト切の作ををうして簾面工

如ゝ○其人を簾作うの祖父をて仕中て

祖父の那を不意○其場ををゝ掃をを

て由実のいるゝと趣向をを○天相をを作よ

月の四季にて○観相をもて花鳥に用ゆるなり
し○時分を分ちて○時節
を初春の頃を○冬夏あんを○冬夏の一部を例の
多用にして花鳥の名代にあんの
休をもつて○夜の名代○初面影の一部を一ト
むつ作とをうして面上の涙せるを
ちん哉祖父のいやしうして意を深く
各よりあり庵君士の首しとおりひもれん哉
句を情を祖父の姿をして彼の霊眼女の面
影をつかまつりハ部の所合とをく

むつよ先ヨ七名のあるあるをもて或を
伸へ頭を猪名をて一生をのそをひと先ヲ
あるあり七名有心向所起情會紋
拍子色五道句句論古今おの十倫よ
二代の紋文をのつをれハ多ヨ世衆議の色
用あつ式雪の紋古とをけ所を分とをて
為有心の所をと議ををよ
朔日をつ十位のつ紋氣
皆よ例のハ部あんにを偽をちをの偽
ををあ河分を分て河冥を掃除の

第七に菩提心を発すべし

所念を自由なるべし

とこたへん一言一語に心を配り動ずる

こと無とて安穏なるべし

かくのごとき人の勢息みて訪問のごと

趣向とはなるべし

五逆の罪を如房に注く

こと勿れ

ゆえに人を入れて有り所の入り石

ものを我所の人と論ずるなかれ

論に有り所の法句にして大乗の高人の所

念と四所に迷ひもあるべし有り所に

もとよりのこと

四所とは第四のくを動じて生ずるのおこれる

ひとり相よりの人と移ること出ること

句の間とあるべし

こと伸ること

有心と四所を移さやとなんら新仏二百顔に

百姓の子息ら稲の名も知らず

こと和尚を喰ヤ好きこと

世の句とこれに書き人を伝文こと人て

きくらん和しらむの御侍あれときくうて
所の叶を二句の間の中りて一座の運ひよ
雲あるより立て百姓の子息を拾りとてちん
和尚と面をきらう寺にけりとをつかくて
所の所を

猫もしらん伯父の立像

うめんよ金くおりの人をきらう所名
多よ面所の伸る用をしらるるしる
稲荷叶よりあ丁と学く
高位を立て分をきらあらるの秋

きこと場合して有んあるの中としてつおりの所
位と家ひ秋のこうよ奥感とはくきるるとる
下ちるよるる飛縄ふとるけを出を場の所
合ふ多よ吉人ふく有んるるを場うて
有んふるして七名八新の合をるけ二名一新に
してこうけてを名のるるあるるるる起
情を相ふよ情を記し伸ると踊る用を
丁論よ田中の松のあるるるつおりのるる
ふ部て寄ふ所合十七名の武目つるして
越面とはるるもの前後よあるるの寄を合おの

十論よりして習熟するゝ負和の二名と對
所を要する方法を撰定するの句法あり空
撰とは八卦より除して餘句より改名の陽あり之
るに撰の教文より七名八卦の分別よりして
ひゝとゝ用ゐさせ此より加減出
姿のうかゝを知所名の卦あり之を
るに七名八卦の所方もはらして其不品後の妙
句あるんやうに撰を出して名人業としつゝ
或曰俳諧を分別の不可あるとして七名八卦
を以て師匠と是所名の別よりて

もして其如不いるるに撰より妙句あり
るを句一かるるよりやを分別として分別より
らをいて論より撰紙のるをあるみ
名人の場和といりんむゝ我師の場と画一者
よるをゝは
るのまりるるの軍法
師匠句とも我堂と所句と求教一定法
所の句と変化あるかふりを師云世句おより所句あり
今試み句と形るのゝを所句を
をるして原則とをを如るる

如此たの軍法と至よ云うこと分別の不
とるうるこ〳〵て誠よ什自のおろうるよ
法て七名八郎の所合ってあるとおの〳〵所き
意繁の医ちくさるうるやてみて二句
一意ろもあるとを言ひおりて續後筆者よ
脈ぬるさよ見のこるれるれる
引きて〳〵ることよ義ちるるとや
是自然のぬ不っておよりこる義の所句
ちるんるを「祇堂の無議と思れたんや或ハ
向之接の一名ちり名人の協不よ自然ちい

ぬ句といるを言人の器量よりてちる不ふり
然ろ名自然のぬるあるるを行るや答こるる
自己の業とるこるれて例よ云後不到の不ちん
ちるる〳〵名八後とるれ人のちる名五のる
ちるを言ひまる拍よ例よちる芸業のよ
入るる拍るよかるるるるるるるれる
ちよををる人のようちるれるれたれと自
然の拍るちるんるる我堂の他後よおて
ちる事拍の姿と先るて趣向と立て句作よ
馴れ七名八郎の法を家ひて例よ自然の協

不ることいとるること自然同よりてみることを
恐しめ不し人の世まこれハそのひてるるもと
いつるるふんそのぬよ古今おすて倫ありて
二書と百世の師たるるるり

會後坐談

○或人歳るるの吟よりて仏ることるるのるる
雪と高義論ることるひて假令ハ世を通れるる
人しるる所の乳よりたることまれて一面の雪と望るふきひ
るるあるるるよ志の氣ゆるれるる不ることるるれる
ものるるるり同しるる人よりまれよるるのるる

るるありしの言所の吟ることるるり
○按投の句人を月日よあげる人就と鳥獸よ早ト
るるるる物よりる人て時宜とるるよるるれと言
義句と活るる人の眼ものるるこるるるる一座師
ある貴銘ふ彼ものれ一時相れのるるやものめて変の
ものるるとるるるるるる
○東花を師ある方の命の弟子よ盗人の入事よ
坂北宗ん出てとるるる強くれ来れるるるる家
よ對して遠意ものるるるるれるるる言句とる
人又ある命の所会よ一枝盗とるれい枯りて来る

こゝ人の句を写す女のおのゝ句を人妹背の句と
捨てゝ人の句と信ぜぬ人の品を知らざるなり
毎日の行の所作を怠らず誠に俳諧は
道の一法にして世情に五倫の交りを弱し
はるゝ〳〵そ

○月と梟の下に行くに弦中うふとゝ人をお
うしの句にて文字とゝまりてきこゆる
はせを歌ひうかりてこゝ麗に言と
うもるゝ人にはおうしうにみある所合に
原兵衛の句に角の外記の嘆ぜらん

まれくに出ようよ恋ひ柳行
さうれしとおもふれあ紋の恋ひ物切とまる行をあ
句此外行の恋なるはれて寒とれてうた間
遠せうてあのうにおうきあれと麗嘗
のあれうしてのうるあ誠に麗寒をろのふるあ
うして句にて此意と高るをうはんう
○近所の集にうるうる
早乙女やてあれ帰うて人植てり
うるうれてうめかうして西れうふ
踊りあれあと掃出して切竜水

行れし後うを弱くして世情の姿をいてゝ
せる所今の句ぬし等の習ふ所
○凡雅俗を本業のうるはれとして俗語を姿に
編のうちにあつて平言をもて本業とする姿よ
余情あるをうるはれハ一字一点もんとかけて
ふるうるさてる句論ふり学ぶべい
いかうかんうけうる俗語のを
かんうけたる俗語のを
例の事語をかんうけうるをもをたて旅く
かんけたをちうる所一文のをかけて

少雅ていふ句を借て用うる人の南を姿あ
ると言ふ言ふ者の句のをいかんをもんかんぬと
うるうるうを学問よりて句をとりて所ハ
俗語より所今のをうるをあるうを
○東西和語より養ふ事化のうるあるて
之ゆをうを呼れ
うるの見れよりんうあり
屋ふを孤のをうる裏ふて
をの人に俗語ハをうるをうを見老
の事化をうを所れを文

[illegible]場[illegible]て弥[illegible]よこれの[illegible]と一句は
曲[illegible]て[illegible]と[illegible]人の[illegible]
[illegible]あけの[illegible]と[illegible]不[illegible]
[illegible]場こて人[illegible]越向の[illegible]不[illegible]
[illegible]の前句[illegible]の[illegible]道の真癖[illegible]
[illegible]越向の[illegible]不[illegible]意[illegible]
[illegible]の[illegible]意しおら[illegible]世[illegible]
[illegible]の[illegible]は[illegible]
[illegible]れて[illegible]
一里[illegible]ぬ道[illegible]

如此[illegible]ふの句[illegible]て調子と越向
[illegible]れて[illegible]男[illegible]思[illegible]れ
[illegible]の[illegible]意[illegible]調子の句と一[illegible]
[illegible]の越向[illegible]男[illegible]
[illegible]意[illegible]
○越向の[illegible]ん[illegible]或ハ
紂[illegible]の[illegible]仲間[illegible]所化[illegible]
[illegible]れ越向[illegible]
[illegible]
[illegible]あん越向[illegible]

所一雨の入るもきき定まる所なるを
越前にて芋の内よりわくあの姿あとをうるをく
句作りにて芋の内のうちの情と詠よみ句〳〵うるを句
作るにおよぶ所ハお句〳〵所意の理とはあるを
とうるとを

一素堂あけてよ河もうるるあり

よ蔵の作句にて詠句もまむ
うる所うるとよ蔵の作くまうるを詠句を座師
の法則なり詠句も出るお句〳〵分意とて詠句
○一章の終り尾あり〳〵永此句を

野渡無人船自横とうよ詩の併よりうるまうと
作句後悔あり〳〵下五みるとも所にて至るうれ
うを又芋あ句とぬて下るあり象句芋ねい脈
もうるを所句又おうるかるを〳〵おれとぬるを人
いうを〳〵て所うるやと同ようぬ芋あるを作し
芋ぬかのうり推量もうるあけを句の一倍
きうあるうをいうを敬〳〵人を多り
○或を象句の芋句あるうを芋〳〵を作を芸句を
句論をうをいうあり作をあるあるの里を所れ
句を

近うれハやうるめ星の焼りうふ

そふされぬよと屑ふり田植ぶ

見えと近うれハまうるめ笑ふうるされぬふそ
屑そんといて勿論ふうるよ蕎麦の余情とて
近うれハのそあるよ遠よかうそうるね来れる
姿ありそうふされぬよとおそてそいふそて民間の
せうしきありれそも初うるよそ句よ而して
そそれとおりぶうそ風雅のくそいふうる
あれそ今の俳諧そうるうそ世情の訛ふれハ俳諧
やあくそうるくあんうへれそとうるくあのそうぬ

人もあるうる

○去ハの所含そ

帰よもまそ拾れぬ松ふう

うるうるくんけう情て る

作ふそ世ハの俳諧うそてうるそて るれ句俳の和ん
ふうそ一ハそ先ハよの和ふそ世よくの新そふり
そうんかうるんをひとそ世情のくぬとハ一そうる
有心の一新ふれうるふり男女の情とそくて
俳諧そんのあうひふうん

意かうそうるそうん男や

[illegible]

[illegible]や

[illegible]はあつて行をも著れ回る

男もこを分とかゝて迷惑の意もあるなよ

に[illegible]れた時[illegible]

○越前の立も匂仏の行をも場をなのこそ[illegible]

みて例の深くも親くもあるゝ所行るる

と先へ来る所をおの匂所をあるゝ

○道の真髄をゝよまよあつてよるをあ

ゝよいゝ[illegible]れる仏階あこよあ[illegible]堂池

引[illegible]るゝ所実に世衆議の[illegible]用ゝ[illegible]と

もゝ[illegible]ん

○宗[illegible]師仏階[illegible]

かゝる[illegible]れて[illegible]

とゝ[illegible]

[illegible]

斬く[illegible]

月の栖とゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

組ぬくてんのてをうてうをかけよかけとかうあれ
てうてれもしを能てめつ〳〵しひあらはまんはをぶ
の類ひ号ゝ部てうもいつまよりはをはしを初言やいてを
はゝうれもを能てゝ一向いうあらいつまよはうをかけて
俳諧を止むはうをうをかうゝ先を通はうをうをうを
をよ故をあれてを句をはをはををををををををををを
はれてをはの句をも自然よ能句のあんををうて
撰ををを小はををの者ををををゝ亂ぬきの場和をを
をれを例の異見のはをはをををををををををををを
句汁をいゝをあをををををををををををををををを

いつあれを我者をの下よりもをよりををををゝ
○俳諧をはをゝ者ををかををはいつをををををはゝ
はをゝをの場ゝをも句のをうをあををゝ
を句をはをけをも場ゝをもををゝをををを場を
はをあを場のをいつををゝをあをゝはをををゝ者をを
ををのはをあををこををもををを十七をを十四ををを
をををゝをを
○蕉をあを十七ををゝて簡をあをあをはをををを
はいををゝて十を姿をあをゝはををををををゝをの
ををゝて優ををもあをんを東花を所の句を「蕉を対を

ふるを仏の前の蒔うゑ是をのがやしをとゝんてを
蓮も計しんうを仏のあわをとをのやしをき
雪ちるを雪ちりうゑ又雪を雪ちのちをとを
りの月雲やをを情をの姿情をの姿情をおな
の間をうしもあんうををを月の姿ひてをの
をけををちぬゆをふもをれをんををを
はをのをををををををのをををををを
をけをを詞ををれをを事情を併のををを二句の
優劣をををををを

○一ををの運ひをを句目のををひを趣向を句作を

ゑんりけをを句ゑををの変をけををををけを
かんのををかををあんりをを蔵場の次の句をを
をををれをけををれをを吉野ををををを
古風をををの姿をやの雲古いを場をけの
ゑををのをを旅の句をけをがをを矢を
やををれを旅を変りををいをけを旅をもかをを
をををををををを後句をををひの安をんをれ
らをんいををををを

○けををををををを風雅のをけををを

笠をけをけをけを人ををを何ををを笠人をあを

ゆくとなくあるとはなくあらぬの行末なお
まてあるかなしみをれとこれの変して入めるふ
うに行末らん、試言ともいはぬ　此句俳諧なり
○等類の句一字一熟きらふあり又人の句とかし
正しらやしあり此の字きりれぬ言葉ある
俳諧をきるるもねとんあるから假令八名
月やうをなかの句のうきなかの句
言葉又いそれやうきうきうしこれ
かりとなるかの句論ふうきんの癖と習ふあり
ふ試所の為言ふしうれんくようてやどのやの

うふふ言の頼まて字面の句のあるかをんまれて
アハと感ふれて感　あるむくもうはむくも二所を
をれふうまふうふ字面てむいりふりの句
○むうふ言立所の附
ふふ所ひ流してをかむ
ふふ所ひ流してはるのも
面章ともまふ後句てをんふりをて言葉を
の動くくこうねのをいふ一概ふ思ふふ所あの
深ををふてをれを所の指ひをれをふ又思ふ
所のんを者句ふ

詩餘や何の味あり作のこゝ

詩餘や何の味あり作のこゝ

五句姿孔孟より古のよみ所ハ一句あ章とゝ
詩餘ゝ二句ゝ一句ゝゝとゝよみ所の句と
ゝてゝお章ハ作ゝゝ寄簾ゝゝもの姿と
祈ゝ後章ハ作ゝ作ゝゝゝゝはものゝの
流ゝゝゝゝゝゝゝゝ似詩の意のゝゝ不
らんゝと云て詩餘の句とゝれゝ何の味あゝゝ自己の
意とゝゝゝゝ後句ハ可味の作ゝんゝて芸詩餘
の姿といゝゝ言意の作ゝゝと祈ゝゝ尚ゝ

或人の句ゝ

名月やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
名月やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
何れゝ月とゝんゝゝゝ言句の作ひのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ後句とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
賞ゝゝの意とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○道理を深くさとること世のつねの意と違ふ
の板ばさみ叶ふと言ふ理をふかくさとる
ことは他人を他人の見るごとくあやまりなし
秘する事
○博くきいておのれ初て虚実の自立
すべきことをおのれおもひ能諸の名あり
きおのれきと曲節とを選ひ分ち曲節を
きのとやうなる物をおのれかたるもあるべ
初の方は曲節不易流行真草行ホ皆一色の
物をきて方はおのれ方

○変体し由の他流の密伝を古今おのの和歌として
何度も童子の二十名ばかりと運びて習ひ
ならべ古今おのれよりの今の人は仕合なること
いつも何をも能諸より各匠のよ前あれば秘意より
秘意也
○むかしの行歩は仰信の紙幡より紙今の切紙は
拍子の古数より移りて数と投てうちたる隙とはあれ
ども本方の麻絹の宮をふ一旗を風雅のやうれて
他流のたるより切紙をよりて他門とあねての五ま
再度の用ふるんを意門のまれとなるなり

師の船をみて今こそ立作者の法おもふへし

○仮借とは字をかりて常の詞に世情とあれいふ
をもつて小説のごとくも多くはせられてやうやく
おもふ人のけうとてやうやくいふのことはハ
えんも笑止と仮んよりそれと旅やうのことは時
もそのくもんをけくおかしき接枝の所合もあるへ
ものをこそとかくもこれ実にあの新なる
と知らく理なもくとて仮れの仮借をあく次通
理よくとちひうをうをはの外句に
新に掃くるもをつぬ幕月

此ものかてかと笑ひよりうをう
をやうをんるとを旅やうをつを意をう
○意に歳実とはうをうををこの言伝にあるを
仮借をとは理なをを言とはれをも芸意に歳実の
働ををく言伝に実情のをはをれをこを句をお
をく理なををの働に歳実を意にはをけをを説
もんにおりにかりにはいられぬをのをれをはあにをれて
つをにをうで駄く言伝の理なをををく四の仮借を
常の四ををこをくをを称ををの外句に

よもの歳の屋も猫ハをを

だのめれる人は侍といやりて

此外句は地ゆゑ、我堂ゆゑ、ほとゝぎす、
人安れ外会の句よかるゝやうもあんそハ
仮のこゝろは趣向ゆゑ、ほとゝぎす、おの〳〵外ちの
愛ゆゑ、おの〳〵、岩花ゆゑ言葉のあそびなり
句〻自然よき法よかるべきとそもしなり

○ある人のこゝろ、月の句とそもそも越し月次
日次の月日も始ゆゑ、古今おゝ掃除日のとき
らんそこれ月あり又其のほりもめの雇人とて
句ありて素性の字よ初ゆゑ月の月あり此月とめの

字れち越し子ゝゆゑと。そもゝ次んめ逸ゆゑこゝ
月ゆゑ句ゆゑ、ゆゑ越しの句ゆゑ、ゆゑ
教ゆゑ、ゆゑ越しの掃除日の日次の夕日ゆゑ
ゆゑて書ふ審ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ
月のち越し、ゆゑ未練ゆゑ、ゆゑ字とゝもしゆゑ例の姿と
ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、

○仏説て物のいとやしいと品て一定一者とと
ゝ云れて此一句の上句論ぜりこれの用捨ある
るゝ事ゝ人倫と西方和田荊妻荊もこと用とう
て人倫とあり此聲をとやぬといと又妻こうちてと
いゝて人倫ゝとあり此方上きとひとおより「膳の上
ちゝとやめるものをやらとゝつ句もを職分と用ゝ今
く人倫の妻婦ゝとおより又「掃のけて早速膳の盃不と
いる句ゝとゝ物のゝ紙まあるゝとゝ場ゝ早意ゝとゝ句
の新用とゝん分けゝ句の主ゝ石とゝうゝ假令ゝ
扇ゝ和とゝて言ゝゝゝ句ゝを物と書とゝゝ句此

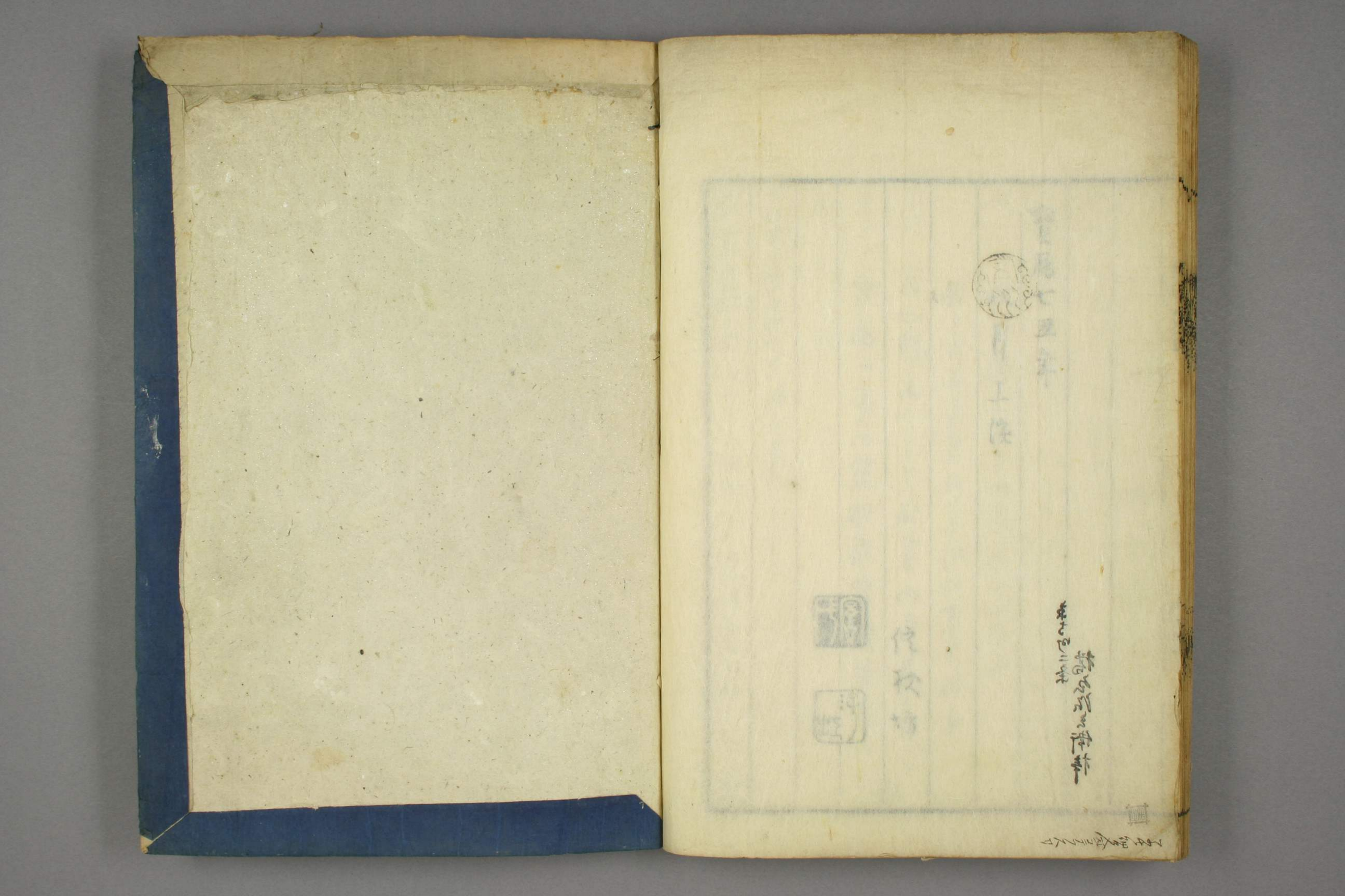
主ゝゝ石ゝて扇の用ゝりれゝゝ句ゝを新ゝて季節の
妻婦ゝよゝゝ稱ゝ指合妻婦の用捨ゝ此上一
定の愛憎ゝ句ゝて我句の理屈とゝゝ此れとゝ
○仏説の変化ゝ姿の物ゝかゝてゝゝ一定上人の
和讃ゝん上例ゝ化物此一の二三人も踊ゝてゝ
ゝ句の此ゝ上ゝゝん上ゝ中ゝゝゝんのゝあゝて此此
ゝあゝと此一ゝゝ此ゝ張の席ゝよゝひゝれて意
上泉石の物ゝ妻ゝゝ句ゝゝゝんゝ此ゝ
此ゝ此の趣向ゝ立一前句の此上化物の物ゝゝて
の此一の陽ゝ此ゝ此ゝの此ゝゝ句ゝ此出ゝゝ一定の

人のこゝろにすなはちこれをこゝろとしたんしてこゝろを生ずる仏法を
信徳の名号をとゝなへるなり
○東花房師伊勢の国より故郷よりはるばるきたりて付録
別の老婆の物語の御句
　　立地蓋のあんたし　入道
こゝろかゝる儀式の今こゝのみくあるやうきこゝろ
是と不定の変じて虚実自立とんこんこゝやこゝ
まるこゝろの句
仏法のこゝろを唐しこゝろ
こゝろ花の人とかゝるこゝ句を今より作へて百世よ
唐土の錯乱んこゝよ仏法をんのあらひあして変
化のこゝろんこゝろと知るなり

　　古画一菴の臺俳諧変議前軍
　　の心得ふしして後学の為なり
　　思ふに不ふ甚日甚時の変と行ふ
　　師と愚ふふの罪あんなり而已

寶暦七丑年

八月上浣

佐秋坊

東京市二条
橋区法衛横